

史料にみる9～10世紀のストゥディオス修道院*

太 記 祐 一**

Studios Monastery in the 9/10th Century

Yuichi TAKI

The Monastery of the Prodomos of Studios (Studios Monastery) in Constantinople was one of the most important monastery in the Byzantine history. It provided a good example of a Byzantine monastery, located in the city-wall. The purpose of this study is to examine three contemporary sources. The facilities of the monastery, described in the sources, suggest the ruralization of the imperial capital, Constantinople, in the 9/10 th century.

Key Words: Studios Monastery, Constantinople, “Rule of the Monastery”, “Testament of Theodore the Studite”, “De Ceremoniis”

1. はじめに

ビザンツ帝国の修道院が、西ヨーロッパとは異なる独自の発展を遂げたことはよく知られている。アトス山に代表される現存する修道院の多くは、ビザンツ期に起源を持つ。またカッパドキアを始めとする有名な遺構も、ビザンツ期の修道院活動なしには語る事が出来ない。

このビザンツ帝国において修道院活動の一つの重要な中心となったのは、東方正教会の修道院という言葉から喚起される我々のイメージに反するのだが、首都コンスタンティヌポリス（現イスタンブル）であった。中期から末期ビザンツ帝国において、首都では皇族や貴族など有力者達の寄進のもと、数多くの修道院が活動していた¹⁾。

特にその中でもストゥディオス地区にあった洗礼者ヨハネの修道院は、5世紀に遡る歴史を持つ帝都で最も歴史のある宗教施設の一つだった。そして9世紀初めに神学者聖テオドロスが修道院長になると、その指導の元で発展を遂げ、アトス山など他の修道院にも絶大な影響を与えた。またこの修道院の聖堂はイスタンブルに現存するほぼ最古の教会建築である。

本稿では文献史料から、この修道院の往時の様子、特にテオドロス以降の9～10世紀の状態に関するものを紹介する。これは当時の都市における修道院の様子を検討し、コンスタンティヌポリスの実態に迫るための資料整理の一環である。

2. 沿革と遺構

まず修道院の歴史的な沿革について概観する²⁾。

この施設の歴史は、5世紀中頃に貴族ストゥディオスが洗礼者ヨハネに捧げ修道院を設立したことに始まる。なお洗礼者ヨハネはビザンツの史料では先駆者（プロドロモス）ヨアンネスと呼ばれることが一般的なので、本稿でも先駆者と呼ぶことにする。また貴族ストゥディオスにちなんで、このあたりの地区はストゥディオス地区（タ・ストゥディウ）と呼ばれていた。このため修道院の名称としては、コンスタンティヌポリス、ストゥディオス地区の先駆者（プロドロモス／洗礼者ヨハネ）の修道院が正しいが、煩雑に過ぎると思われるので、本稿では慣例に従いストゥディオス修道院と呼称する。

この修道院はしばらく史料に登場しない時期が続くが、8世紀後半にはイコン破壊運動に反対する修道院勢力の中心として迫害の対象となり、一時は解散寸前まで衰退した。9世紀初めに修道院長になったテオドロスが組織

* 平成16年11月30日受付

** 建築学科

改革をおこない、その結果、数百人の修道僧を擁し写本の生産など文化的な中心として機能する大組織に発展していった。またこのテオドロスの組織は、アトス山を始め多くの修道院組織に影響を与えたとされる。

10世紀前半に聖遺物-先駆者の頭部-を獲得した後、帝室とも関係を深め、11世紀には皇帝の保護を受け改装工事も実施された。この間、修道院は政治犯の監禁場所として利用されたり、また修道院から総大主教が誕生するなど、帝室との関連をうかがわせる逸話が伝えられている。

しかし12世紀、コムネノス朝時代になると勢力に陰りがみえ、1204年にはラテン帝国の略奪を受けて解散状態へ追い込まれた。しかし13世紀末に活動を再開、施設も改修工事を受け、指導的地位に返り咲いた。

オスマン帝国占領後の15世紀末、イムラホール・ジャーミーとしてモスクに改装された。1782年に火災と地震で大損害を受けたが、1820年再建された。1894年、地震による被害を受け、さらに1920年に火災にあい、その後放置されたまま現在に至っている⁽³⁾。

次に建築遺構である。本修道院はかつては大規模な施設であったが、現存するのはバシリカ式の聖堂だけである [図1]。これは数多くの文献で紹介されている⁽⁴⁾が、筆者の知るかぎり現在は閉鎖中である。三廊式で高廊と小規模なクリプタ、ナルテクスを有し、木造天井でアトリウムを持っていたものと推測されている [写真1/2]。身廊と側廊の間の列柱が残っているが、古典的オーダーを維持している最後の作例の一つと評価されている⁽⁵⁾。また現存する部材の断片から、内陣障柵 (テンプロン) の復元が試みられている⁽⁶⁾。この聖堂は煉瓦のスタンプ

から5世紀中頃の作品、つまり修道院設立当時の建築であり、現存する遺構の中ではコンスタンティヌポリス最古の教会建築と考えられている。なお現存する床面は11世紀のものである。

3. 史料の紹介と検討

本修道院の9・10世紀の様子を伝える史料としては、まずテオドロスの改革に伴う二つの史料『コンスタンティヌポリス、ストゥディオス聖ヨアンネス修道院のためのストゥディオス修道士テオドロスの申置き』(以後『申置き』と略す)と『ストゥディオス修道院設立規則』(以後『設立規則』と略す)とが特に有名である。この二つの史料はいずれも9世紀前半のものだが、既に先行研究でよく取り上げられている。それ故、本稿では修道院建築に関連する部分のみを紹介する。ついで百年ほど新しい史料になるが、ビザンツ宮廷の儀礼書『儀式について』第二卷第十三章にまとまった記述をみることが出来るので、これを紹介する。なお同じ10世紀の主要な史料である『パトリア・コンスタンティヌポレオス』⁽⁷⁾と『大教会のテュピコン』⁽⁸⁾には、それぞれ短い言及があるだけで具体的な建築に関する記述はみられない。

3.1 『ストゥディオス修道院設立規則』

ストゥディオス修道院に関する史料のなかでもっとも重要なものは、『設立規則』⁽⁹⁾である。これはテオドロスの改革を受けて書かれたものだが、テオドロスは815年にイコン破壊運動の再燃で追放され826年に亡くなっており、840年代に彼の遺骸が修道院に戻された後のものと考えられている。本史料は主に二つの写本で知られている。一つ目はアトス山ヴァトペディ修道院写本322⁽¹⁰⁾

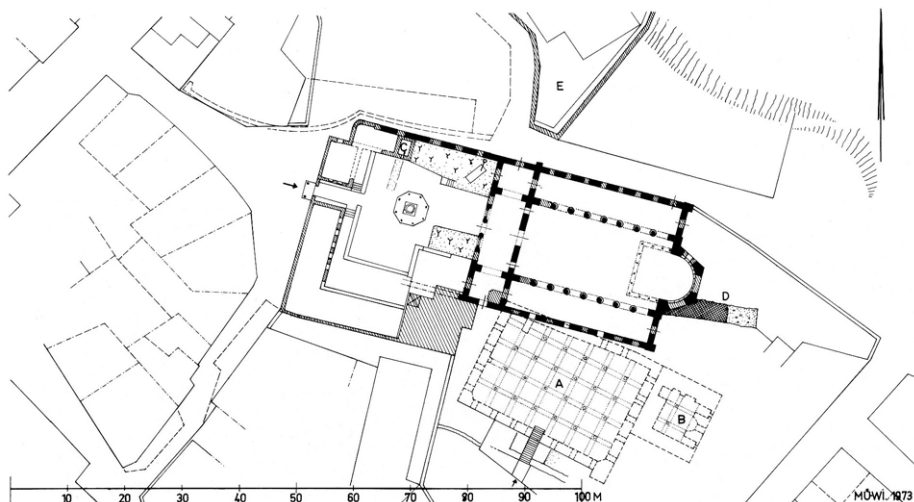


図1 ストゥディオス修道院の現状平面図 (ミュラー=ヴィナーによる)

(13/14世紀)でドミトリエフスキーの資料集⁽¹¹⁾で紹介された(以後、写本Aと記す)。二つ目は法王庁ギリシャ語写本2029⁽¹²⁾(9/10世紀)でミーニユの「ギリシャ語教父著作全集」⁽¹³⁾で知られる(以後、写本Bと記す)。本論文では最新の英語版が、二つの写本を対比的に紹介しているので⁽¹⁴⁾、これを元にしながらか史料の内容をみていきたい。二つの写本のうち写本Bが年代的に古いものであるため、これを中心に検討し、適宜、写本Aで補うことにする。なお写本Bには章番号があり、写本Aにはないが、ここでは便宜上、写本Bの章番号に従って話を進めていく。なお本文中の史料引用箇所は()に原語の音訳、[]に訳者の補足、—に原註を記す。

まず第2章の復活祭の儀式に関する記述に、修道院の聖堂に関して以下の文章がある。

2. 彼は朝の祈り(ドクソロジー)をおこなうために兄弟達を呼び集めながらランタンを持って寝室〔複数〕を巡る…〈中略〉…兄弟達全員が中心の聖堂のナルテクスに集まり黙祷する間、司祭は香炉を手にとってまず神聖な至聖所に香を撒く、そこから彼は前にある障



写真1 ストゥディオス修道院聖堂の内部
入口よりアプシスを望む(1992年:筆者撮影)



写真2 ストゥディオス修道院聖堂の入口
アトリウムより室内を望む(1992年:筆者撮影)

壁を歩いて抜け、聖堂の北側に沿って通り抜ける。皇帝の門に来ると、兄弟達に香を撒き、すぐに南側を元来たところへ戻る。兄弟達は彼の後から聖堂に入る。儀式の前に聖堂内に香を撒く様子はたいへん興味深い。また修道僧が用いる寝室が複数あることもわかる。なお写本Bは朝の儀式に関する記述が中心であるが、写本Aにはそれ以外の記述もある。室内での儀式についてはその後、前唱者あるいは他の兄弟が説教壇に昇って神聖な教父ヨアンネス・クリュソストモスの「敬虔にして神を愛する人は誰であれ」で始まる説教を朗読する。とあり、説教壇も確認出来る。ちなみにこういった記述に登場する聖堂は「中心の聖堂」としか名称が記されていないが、現存する建築を指すことを否定する要素はない。

つぎに写本Bの第37章、神現祭(1月6日)に関する説明には聖堂前のアトリウムの様子が記されている。

37. 以下のことを知らねばならない。神現祭の夜の勤めの際、神の典礼から解散した後…〈中略〉…司祭は器を集めて〔内陣障柵/テンプロン中央の戸口つまり〕神聖な扉(ハギア・テュリア)へと行き祈りを捧げると、『主よ、あなたもヨルダン川で洗礼をお受けになったのだから』を歌いながら〔聖堂のアトリウムの〕泉水へ⁽¹⁵⁾と出る。…〈中略〉…これ〔聖歌〕が三回繰返されたら司祭は祈りを捧げ、神聖な礼拝(ドクソロジー)は終る。そこで兄弟達は順序よく列を作って食堂へ行く。

同じ祭日について細部に異なる点はみられるが、写本Aの第38章でも同様の記述がみられる。この記述から聖堂のアトリウムとその泉水、そして食堂という修道院の基本要素が確認できる。

これと関連して、写本Bの第31章受胎告知の祭に関する記述には、以下の文章をみる事ができる。

31. 以下のことを知らねばならない。第六の刻に木製のセマントロンが鳴ると、我々は皆、凡てにおいて汚れなき神の母の館〔聖母の礼拝堂〕に集合する。夕刻の勤めが始まると、数名がそれをおこなうためにそこに残り、他のものは連祷を唱えながら修道院を練歩く。彼らが戻ると〔典例への〕入場〔がおこなわれ〕、そして完全な典礼〔もおこなわれる〕。その後、魚とオリヴオイルを食べ、各々三〔杯のワイン〕を飲む。

写本Aもほぼ同じ内容であるが、聖母の礼拝堂あるいは聖堂が言及されている。つまり当時、本修道院には「中心の聖堂」とは別に聖母の礼拝堂があったことがわかる。

他に修道院の施設に関する記述を探すと、第24章以降に以下の記述を見つけることが出来る。

24. 以下のことを知らなければならぬ。我々が新た

に兄弟達を受け入れる場合、それが他の修道院の者であろうと修道生活を求める俗人であろうと、修道院をみて体験するために二ないし三週間の間、宿泊所⁽¹⁶⁾に留める。…〈後略〉

25. 以下のことを知らなければならない。反抗的で手に負えない兄弟〔修道僧〕達を監禁するための監禁場所がある。…〈後略〉

26. 以下のことを知らなければならない。肉体労働が休みなどには図書係が木のセメントロンを一回鳴らす。すると兄弟達は書庫⁽¹⁷⁾に集まり、各々本を手にとって夕方まで読む。…〈後略〉

以上のそれぞれから、宿泊所、監禁場所、書庫の必要性が明記されていることがわかる。しかし残念ながら、その規模などは不明である。

さて上記に加えて写本 A の第二章には、復活祭の翌日について以下のような記述をみることができる。

次の朝、昼の第二の刻に前唱者が三回ノックをしたら、我々は偉大な先駆者〔洗礼者ヨハネ〕の聖堂に集合する。儀式用のローブを身に着けて司祭達と全ての兄弟は価値ある十字架と崇敬すべき神聖な聖像を取り上げる。我々は全員が大声で「キリストは復活された」を唱えながら、修道院の近くのワイン畑を巡る。それから同様にして海岸に行く。礼拝（エクテネ）が終わったら全てに神聖な神の母の聖堂へ行く。そこでも同様に礼拝（エクテネ）をおこなったら先駆者〔洗礼者ヨハネ〕の聖堂に戻る。行進が入る前に前唱者が合図をして始めの〔開堂の？〕祈りが捧げられる。司祭達が入ったら、神の典礼がおこなわれる。同じようにして棕櫚の日曜日と受胎告知の日にも、天候上の状態が良ければ行進をする。

ここでは「先駆者の聖堂」との名称がみられ、おそらくは「中心の聖堂」と同一で、現存する建築を指すものと思われる。同時に修道僧達の行進が「近くのワイン畑」と「海岸」に行くことも明記されており、これらも修道院の一部だった可能性が高い。

3.2 『テオドロスの申置き』

ここでもう一つの史料に目を転じてみよう。『申置き』⁽¹⁸⁾は追放されたテオドロスが死去前に書いたものと考えられている。これは文字通り修道院のメンバーへの心得集であり、信仰のよりどころとなるべき神学者を列挙し、修道院長と修道僧のまもるべき掟を説明している。その中で、

4. 貴方は貴方自身が使うためにも貴方の修道院のためにも農地のために奴隷を所有してはならない。

5. 〈前略〉…貴方は修道院においても農地においてもそれ〔牝の家畜〕を飼ってはならない。とあり、修道院が「農地」を持っており「家畜」がいる

ことがわかる。さらに

16. 貴方は本当に必要でないかぎり、誰であろうと女性を入れるために修道院の扉を開けてはならない。とあり、おそらくはアトス山などの修道院と同様、扉や壁で周囲と切り離され、扉で閉じることが可能だったようである。

3.3 『儀式について』

ビザンツ宮廷の儀式の次第書である『儀式について』⁽¹⁹⁾では、第2巻第13章にストゥディオス修道院が登場する。第13章は「市民／農村（バガナ）の日曜日、他所のコミュニティーの〔祭〕日、皇帝が聖使徒や他の聖堂へ礼拝のため訪れねばならない時に目撃されるべきこと」⁽²⁰⁾と題されており、様々な祭日に皇帝が様々な施設を訪問することが日付順に記載されている。しかしながらすべての記載が終わったあとで、8月29日の先駆者斬首の記念祭が紹介される。このため本史料は10世紀中ごろの成立と考えられているが、その編集の最終段階で追加された可能性がある⁽²¹⁾。これは先にみた、修道院が聖者の頭部を獲得し帝室との関連を深めた、という沿革と矛盾しない。本文の該当箇所は以下の通りになる

八月二九日、同様に〔儀式を〕執り行う事を知っておくこと。聖先駆者（プロドロモス）ヨアンネス〔洗礼者ヨハネ〕斬首〔の記念祭〕である。ストゥディオス〔地区〕の彼の神聖な聖堂（ナオス）に行った皇族（デスポテス）達は、既に述べた聖パンテレエモンの記念祭の形式に従う。明方、元老院（シュンクレトス）はみな礼服（スカラマンギオン）を着けてストゥディオス〔地区〕へ進む。そして〔元老院を構成する〕長官（マギストロス）達、貴族（パトリキオス）達、官僚（オフィキアリオス）達は〔ストゥディオス修道院の〕海に向かった門の外で立つ。これに対して部屋付宦官（クブクレイオン）達、マンガラビオン近衛外人部隊とヘタイレイア近衛外人部隊の兵士達（ホイ・トゥ・マンガラビウ・カイ・テス・ヘタイレイアス）、高官の子供（アルコントゲンネマ）達は港へ〔行く〕と、そこには高速ガレー船（ドロモン）が用意されている。

以下を知らねばならない。修道院の修道僧達は門から港へ左右に列をつくって立つ。そこで既に述べた聖パンテレエモンの形式に従って皇族が到着して船を下りたら、部屋付宦官達、マンガラビオン隊員、ヘタイレイア近衛外人部隊の兵士達が先導し、もちろん前に行く修道院長（ヘグメノス）は香炉を修道僧達は蠟燭を持つ。皇族達が門に近づくと、そこには長官達、貴族達、官僚達がいて、彼らは皇族達にひれ伏して挨拶し、立ち上がる彼らの〔皇族達の〕後に付き従う。そこで皇族達は前を進み外庭（エクサエロス）を経て上り、その柱廊（ディアパティコン）を経てナルテ

クスへ東へ向かって右の部分から入り、そこで自分の金で刺繍された短いマント(サギオン)を纏って蠟燭を灯し、聖職者達と一緒に入場し再び蠟燭を灯す。以下を知らねばならない。典礼への入場[小聖入]がおこなわれたらまず、侍従長(プライポシトス)から第一の皇帝(ホ・プロトス・バシレウス)は香炉を受け取ると香を捲き、至聖所(ペーマ)の右に行き—そこには先駆者の神聖な頭部が安置されているからだ—そこでも蠟燭を灯してそれに接吻し、[至聖所から]退出したらそこにある控室(メタトリオン)に入って、礼服(スカラマンガオン)を脱ぐと僧服(コロピオン)を纏い、側廊(ギユナイキテス)に入り至聖所(ペーマ)の東に向いて右の部分に入って立ち、福音書の朗読へむけて蠟燭を灯す。その後、ここの[植栽豊かな]庭園(アナデンドラディオ)に出ると、もし命令するならば高官達と食事をし、修道僧達は食事の間ひかえている。食事の後で立ち上がると、通ってきた路を通過して高速ガレー船まで、既に述べたように先導されて戻る。⁽²²⁾

ここでは幾つかの興味深い記述がみられるが、その中でも修道院の施設に関連するものとしては以下の諸点が指摘できる。

まず修道院のそばに港があること、また修道院には外庭(エクサエロス)と庭園(アナデンドラディオ)という二つの庭がある。このうち外庭(エクサエロス)は柱廊(ディアパティコン)で先駆者の聖堂の「ナルテクスへ東へ向かって右の部分」に連絡しているので、聖堂の南側にあることがわかる。これに対して庭園(アナデンドラディオ)の位置は不明確である。そして聖堂内、至聖所内南側に先駆者の遺物が安置され、皇帝の控室(メタトリオン)が用意されている。記述の前後関係から控室(メタトリオン)の位置は堂内南側廊と考えたいが、しかし明記はされていない。

4. まとめ

以上、三つの史料の記述を総合すると以下のように考えることが可能である。

まず修道院の中心は先駆者の聖堂でこれが現存する建築であるが、これとは別に『設立規則』から聖母の礼拝所もあったことがわかる。先駆者の聖堂は『儀式について』より堂内、至聖所内南側に先駆者の聖遺物が安置され、皇帝用控室も存在したことがわかるが、その位置は確定できない。またおそらくは至聖所前に、『設立規則』の記述から説教壇があったことが想像される。

また修道院内には様々な施設があった。食堂や寝室群は建築史の常識からも容易に想像されるものである。『設立規則』に規定される宿泊所(ケセノドキオン)は、

建物の機能から推測しても、独立した建築だった可能性が高い。これに対して監禁場所や書庫が独立した建築だったか否かは不明である。

修道院内の空地に関しては、聖堂前のアトリウム(ルテル)とは別に、少なくとも外庭(エクサエロス)と庭園(アナデンドラディオ)という二つの庭があったことが『儀式について』からわかる。同史料の他の部分からの印象でいえば、外庭(エクサエロス)は整備され整地された回廊を持つ中庭、庭園(アナデンドラディオ)は緑豊かな開放的な庭、とも想像できる。しかし、例えば聖堂前のアトリウム(ルテル)に泉水が整備されていることに類する、より詳細な記述はみられない。

最後に『申置き』の「農地」と「家畜」であるが、これは修道院が自給自足を旨とすることから考えて驚くにはあたらないが、『設立規則』の「近くのワイン畑」と「海岸」に関する記述と合わせるならば、修道院の側にあった「農地」の一部が「近くのワイン畑」と「海岸」であると考えられる。ここで『申置き』第16条の扉および女人禁制の規則と、第5条の「牝の家畜」に関する規定を合わせて考えるならば、修道院の周囲に修道院が所有する「農地」があり、そこには「ワイン畑」や「海岸」も含まれていて、これらが塀や壁で周囲から隔絶されていたと考えることができる。そして『儀式について』の港と門に関する記述はこのことを裏付けるように思われる。

ここで修道院周辺の様子をみても、修道院から海沿いの城壁まで距離があることがわかる[図2]。現在は住宅地となっているが、ここは海に向かって下りる斜面である。海沿いの城壁もビザンツ期の遺構であるので、ここの地形は当時とそんなに変わっていない可能性が高い。この修道院から海までの斜面が、あくまで推測の域を出ないが、修道院付属の農地であった可能性は高いのではないか。

言い換えるならば9～10世紀のコンスタンティヌポリスは、テオドシオスの城壁の内側でも、ストゥディオス修道院周辺の西南周辺部にあつては、かなり人口もまばらで農地化が進んでいたとみなすことが出来るだろう[図3]。

註

- (1) Mango C., *Byzantium The Empire of the New Rome*, London, 1980. Magdalino P., *Constantinople Médiévale*, Paris, 1996.
- (2) Janin R., *La géographie ecclésiastique de l'empire byzantin, première partie: le siège de Constantinople et le patriarcat œcuménique, tome III: les églises et les monastères*, 2e ed. Paris, 1969. pp.430-40. Müller-

Wiener W., *Bildlexikon zur Topographie Istanbules*, Tübingen, 1977. pp.147-52. Kazhdan A., Talbot A.M. & Cutler A., "Stoudios Monastery", *The Oxford Dictionary of Byzantium*, New York-London, 1991, pp.1960-61. trans. Miller Th., "Theodore Studites: Testament of Theodore the Studite for the Monastery of St. John Stoudios in Constantinople", *Byzantine Monastic Foundation Documents*, ed. Thomas J. et al., Washington D.C., 2000, vol.1. pp.67-83.

- (3) 被災前の状況は幾つか記録が残っている。身近なものとしては、伊東忠太の旅行中の写真がある。鈴木博之編『伊東忠太を知っていますか』, 王国社, 2003. pp.189ff.
- (4) Ebersolt J. & Thiers A., *Les églises de Constantinople*, Paris, 1913, rp. London, 1979. pp.2-18. Deichmann F.W., *Studien zur Architektur Konstantinopels im 5. und 6. Jh. nach Christus*, Baden Baden. 1956. pp.69-72. Mango C., *The Art of the Byzantine Empire 312-1453*, Englewood Cliff, 1972, rp.Toronto,1986. p.38. Krautheimer R., *Early Christian and Byzantine Architecture*, 4th ed. revised by Krautheimer R. and Curcic S., Harmondsworth, 1986. pp.104-06. Mathews Th. F., *The Early Churches of Constantinople: Architecture and Liturgy*, University Park and London, 1971. pp.19-27. Mango C., *Byzantine Architecture*, Milano, 1974, English trans. New York, 1976. pp.38ff. (シリ

ル・マンゴー著飯田喜四郎訳『ビザンティン建築』本の友社 1999年 pp.36ff.)

- (5) Deichmann, *ibid*.
- (6) Mathews, *ibid*.
- (7) "Πάτρια Κωνσταντινουπόλεως", III.87. ed. Preger Th., *Scriptores originum Constantinopolitanarum*, Leipzig, 1907. rp. New York, 1975. p.247, Berger A., *Untersuchungen zu den Patria Konstantinupoleos*, Poikila byzantina 8, Bonn, 1988. pp.363ff.
- (8) 11月11日の条にテオドロスの記念祭に言及があるだけである。Mateos J., *Le Typicon de la Grande Église*, 2 vols., Roma, 1962-63. vol.1, p.97.
- (9) Ἱποτύπωσις κατάστασεως τῆς μονῆς τῶν Στουδίου.
- (10) Codex Vatopedi 322 (956).
- (11) ed. Dmitrievsky A., *Opisanie liturgicheskikh rykopisei*, Kiev, 1895, vol.1, pt.1, pp. 224-38.
- (12) Codex Vaticanus graecus 2029 fol.179-85.
- (13) Mai A., & Cozza-Luzi J., *Nova patrum bibliotheca*, Roma, 1849, vol.5, pp.111-25. reprint. ed. Migne J.P., *Patrologiae cursus completus. Series graeco-latina*, vol.99, 1704-20.
- (14) trans. Miller Th., "Stoudios: Rules of the Monastery of St. John Stoudios in Constantinople", *Byzantine Monastic Foundation Documents*, ed. Thomas J. et al., Washington D.C., 2000. vol.1. pp.84-119.



図2 ストゥディオス修道院と周辺の地図 (ミュラー=ヴィーナーによる)

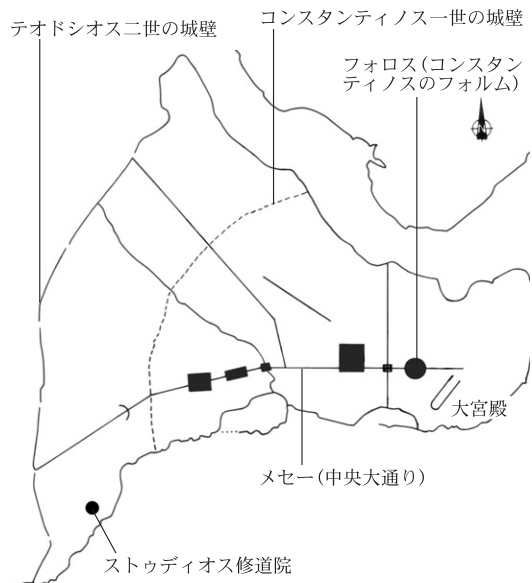


図3 10世紀コンスタンティヌポリスの市街図とストゥディオス修道院 (マグダリーノによる)

- (15) 英訳による：ミーニュ版では“..... ἐξέρχεται μετὰ τῶν ἀδελφῶν εἰς τὸν λουτήρα”とあり直訳すると「兄弟達とルテルへと出る」となる。シュトゥルーベによると、ルテルとはアトリウムを指す単語だが語源的には泉水を意味する。
- (16) クセノドケイオン τὸ ξενοδοχεῖον
- (17) 原文では τὸν τόπον τῶν βιβλίων とあり文字通り「本の場所」である。これを図書館の様に室名ととらえるべきか否かは意見が分かれるであろう。
- (18) trans. Miller Th., “Theodore Studites: Testament of Theodore the Studite for the Monastery of St. John Stoudios in Constantinople”, *Byzantine Monastic Foundation Documents*, ed. Thomas J. et al., Washington D.C., 2000. vol.1. pp.67-83.
- (19) “De ceremoniis”, II. 13. Reiske J.J., *Constantini Porphyrogeniti imperatoris De ceremoniis aulae byzantinae*, Bonn, 1829-1830, pp. 562ff.
- (20) ΚΕΦ. ιγ'. Ὅσα δεῖ παραφυλάττειν ἐν παραγῆ κυριακῇ, ἢ ἐν ἄλλῃ κοινῇ ἡμέρᾳ, μελλόντων τῶν δεσποτῶν ἀπιεῖναι εἴτε εἰς τοὺς ἀγίους ἀποστόλους, εἴτε εἰς ἕτερον ναὸν εὐξασθαι.
- (21) 太記祐一, 『儀式について』の成立過程に関して, 『福岡大学工学部集報』第70号(2003/03), pp.189-195.
- (22) Μηνι Αὐγούστῳ κθ'. Ἰστέον, ὅτι ὁμοίως ἐπιτελεῖται καὶ ἡ ἀποτομὴ τοῦ Ἁγίου Ἰωάννου τοῦ Προδροῦμον, τῶν δεσποτῶν ἀπιόντων ἐν τῷ ἁγίῳ αὐτοῦ ναῶ εἰς τὰ Στουδίου κατὰ τὸν προρ' ῥηθέντα τύπον ἐν τῇ μνήμῃ τοῦ Ἁγίου Παντελεήμονος. Τῇ ἔωθεν γὰρ προέρχεται πᾶσα ἡ σύγκλητος ἀπὸ σκαραμαγγίων εἰς τὰ Στουδίου. Καὶ οἱ μὲν μάλιστα καὶ πατρίκιοι καὶ ὀφφικιάλιοι ἴστανται ἕξω τῆς πρὸς θάλασσαν πόρτης· οἱ δὲ τοῦ κουβουκλείου καὶ οἱ τοῦ μαγλαβίου καὶ τῆς ἑταιρείας καὶ τὰ ἀρχοντογεννήματα εἰς τὸν ὄρμον, ἐνθα ὁ δρόμος ὀρμῆ. Ἰστέον, ὅτι οἱ τῆς μονῆς ἀββάδες ἀπὸ τῆς

πόρτης ἕως τοῦ ὄρμου ἴστανται στιχηδὸν δεξιᾷ καὶ ἀριστερᾷ. Τῶν δὲ δεσποτῶν πολλοὶ ἐρχομένων κατὰ τὸν προρ' ῥηθέντα τύπον τοῦ ἁγίου Παντελεήμονος καὶ τῆς νηὸς ἐκβάντων, δηριγεύονται ὑπὸ τε τοῦ κουβουκλείου καὶ τῶν μαγλαβιῶν καὶ τῶν τῆς ἑταιρείας, δηλονότι τοῦ ἡγουμένου προπορευομένου μετὰ θυμιατοῦ καὶ ἀββάδων μετὰ κηρῶν. Τῶν δὲ δεσποτῶν πλησιασάντων τῇ πόρτῃ, ἐνθα ἴστανται οἱ τε μάλιστα καὶ πατρίκιοι καὶ ὀφφικιάλιοι, πίπτουσι οἱ αὐτοὶ προσκυνοῦντες τοὺς δεσπότας, καὶ ἀνιστάμενοι συνακολουθοῦσι ὕψιθεν αὐτῶν. Ὅτι δὲ δεσποταὶ προπορευόμενοι διὰ τοῦ ἐξαέρου ἀνέρονται, καὶ διὰ τῶν ἐκεῖσε διαβατικῶν εἰσέρχονται διὰ τοῦ πρὸς ἀνατολὴν δεξιῷ μέρους τοῦ νάρθηκος, κἀκεῖσε περιβαλλόμενοι τὰ ἐαυτῶν χρυσοπερίκλειστα σαγία, ἄπτουσι κηροῦς, καὶ εἰσοδεύουσι μετὰ τῶν ἱερέων, καὶ πάλιν ἄπτουσι κηροῦς. Ἰστέον, ὅτι εὐθέως γίνεται ἡ εἴσοδος τῆς λειτουργίας, καὶ ὑπὸ τοῦ πραιποσίτου λαβὼν ὁ πρῶτος βασιλεὺς θυμιατῶν, θυμιᾷ, καὶ δεξιᾷ τοῦ βήματος ἐρχόμενοι, (κἀκεῖσε γὰρ πρόκειται ἡ τοῦ Προδροῦμου ἁγία κἀρα.) ἄπτουσι ἐκεῖσε κηροῦς, καὶ ταύτην ἀσπάζονται, καὶ ἐξερχόμενοι εἰσέρχονται εἰς τὸ ἐκεῖσε μητατώριον, καὶ ἐκβάλλουσι τὰ σκαραμάγγια, καὶ περιβαλλόμενοι κολόβια εἰσερχόμενοι ἴστανται εἰς τὸν γυναικίτην εἰς τὸ δεξιὸν πρὸς ἀνατολὰς μέρος τοῦ βήματος, καὶ ἄπτουσι κηροῦς εἰς τὴν τοῦ εὐαγγελίου ἀκρόασιν. Εἰθ' οὕτως ἐξερχόμενοι εἰς τὸ ἐκεῖσε ἀναδενδράδιον κραματίζουσι μεθ' ὧν ἂν κελεύσωσι ἀρχόντων, διακοινοῦντων ἐπὶ τοῦ κράματος τῶν ἀββάδων. Ἀπὸ δὲ τοῦ κράματος ἀνιστάμενοι ἀπέρονται δι' ἧς διήλθον ὁδοῦ εἰς τὸν δρόμονα, δηριγεύόμενοι καθὼς εἰρήκαμεν.